



## 国家・メディア・コミュニティ

大石裕・著  
慶應義塾大学出版会 / 5060円

## フレイクニュースと メディア・ナショナリズム

二月末から始まったウクライナ侵攻は武力行使と情報戦が入り乱れたハイブリッド戦となった。双方のフレイクニュースが戦争の手段として使われ、また世界各国で感情的世論が表出している。本書ではデジタルメディアの普及などが、メディアや情報への一層の集中化と感情的世論の顕在化を促進し、メディア・ナショナリズムの高揚を招いたと警鐘を鳴らす。国民国家、ナショナリズムとマス・メディアの密接な関係を読み解く一冊。

日本外交は、米国の圧倒的優位な戦略環境の下で日米同盟を基軸としてきた。だが現在、「多極世界」「Gゼロ世界」「米中二極構造」など戦後国際秩序の衰退が語られる。著者は米国の衰退と米国による国際秩序の衰退は別なものと考え、今後は各地域各領域に複層的な秩序、「マルチプレックス世界」が形成されるといふ。東アジアに「中国優位の秩序」が生まれれば、日本の過度な対米依存構造は窮地に陥りかねない。著者はこう警告する。

## マルチプレックス世界は 国際秩序を変えるのか



## アメリカ世界秩序の終焉

マルチプレックス世界のはじまり  
アミタフ・アチャリア・著 / 芦澤久仁子・訳  
ミネルヴァ書房 / 3850円

## 武力行使ではない 軍事力の活用とは



## 防衛外交とは何か

平時における軍事力の役割  
渡部恒雄 / 西田一平太・編  
勁草書房 / 4400円

軍事力という資産<sup>アセット</sup>を他国との協調のための外交手段として用いる「防衛外交」は、近年の国際関係の一つの潮流をなしている。本書は、防衛外交という概念を整理した上で、日本および諸外国の事例を検討し、日本の課題（手段やリソースの不足、対外政策全体での防衛省・自衛隊の活動の不明確な位置づけなど）を指摘する。軍事力を平時の外交にどう活用するかが、いま問われている。



**南シナ海問題の構図**  
 中越紛争から多国間対立へ  
 庄司智孝・著  
 名古屋大学出版会 / 5940円

## 米中対立の構図にない 地域のダイナミズム

南シナ海問題は、米中の大国間対立のみに還元できない。中越の「陣取り合戦」が、ASEAN諸国、米国と日本・豪州などその同盟国を巻き込み、多国間対立に拡大した。本書は、一党独裁維持のため「全方位」外交を展開するベトナム、民主的な政権交代で路線転換したフィリピン、そして一体性に課題を抱えるASEANが、それぞれ国際的な規範を活用する自律的なアクターとして、地域秩序に与えた影響力を浮き彫りにする。

**戦後沖縄の政治と社会**  
 「保守」と「革新」の歴史的位相  
 平良好利 / 高江洲昌哉・編著  
 吉田書店 / 2970円



沖縄の日本復帰から五〇年。沖縄戦や米軍基地問題が関心を集める一方、米統治時代から復帰後までを貫く研究は乏しい。政治学・経済学・社会学・行政学・歴史学の分野横断的な研究会から生まれた本書は、冷戦の文脈に基づく「保守と革新」の構図が「反共」の米統治下でいかに出現し、復帰後の経済開発・自治体外交や本土との関係、そして現在の「オーラル沖縄」にいかに関与したのか、鳥瞰的に捉えようとする実証研究である。

## 私たちはどれほどに 戦後沖縄を知っているか

駐米大使を務めた著者は、長年、日本外交の最前線で活躍した。だが本書では、華々しい成功物語ではなく、数々の失敗談が赤裸々に綴られる。準備を怠り上司に詰問された海外出張、総理訪問時の「チェックミス」など、自らの失敗から得た教訓は、外交舞台とは縁遠い読者にとっても金言だ。将来に悩む学生、わけもわからず仕事に放り込まれた社会人——本書を貫く「まだ間に合う」のメッセージは、そっと背中を押してくれる。

**まだ間に合う**  
 元駐米大使の置き土産  
 藤崎一郎・著  
 講談社現代新書 / 990円



## 人生に「遅すぎる」はない ある外交官の生き抜き方